

実習レポートを生かした共感的学習の試み

—次の実習につながる効果的指導を目指して—

山 森 泉

- | | |
|---------------------------|---------------------|
| I. 1. はじめに | III. 1. 学生の反応 |
| 2. 大学教育におけるレポート指導と双方向性の授業 | 2. 学生の感想 |
| 3. 現在の学生気質 | 1) 読み合わせの感想から |
| II. 1. 課題レポートの意図 | 2) 発表を聞いた感想から |
| 2. レポート提出と再提出指導 | 3) 肉声の効果 |
| 3. レポート内容と読後の印象 | 3. 終了後のアンケート結果 |
| 4. 読み合わせへの準備と導入 | IV. 1. 共感性と気づきによる学び |
| 5. レポートを読んだ感想類型 | 2. 配慮すべきことがら |
| 6. レポート発表の試み | 3. 終わりに |

I. 1. はじめに

保育士資格取得のためのカリキュラムが改訂され、今年度から1年次での保育所実習が従来の5日間から10日間になった。本学では7月と12月に5日間ずつ同じ保育所で実習を行うことで年間計画を立てている。これまでも2年次では施設実習・保育所実習共に10日間ずつ行っており、日数自体はさほど問題ではない。しかし、期間を置いて同じ保育所で実習をすること、初めての実習を終えてその反省が十分次の実習に生かせるかどうかという点では、今年度の1年生が初めてのケースとなる。

「保育実習指導」の担当は、「乳児保育」を担当する細田章子講師とのチームティーチングである。「保育実習」に関して素人である筆者は、前期は実質的にはアシスタントとして、主に書類配布回収、実習先割り振り、課題レポート指示などに当たってきた。したがって、ある意味では初めての実習を行う学生と同様に不安だらけであり、保育所の実態についても、筆者自身の子育て経験で関わった二保育所以外はまったく知らない頼りない担当者であった。だからこそ、学生自身が抱く不安感や戸惑いをどうにかして解消し、前向きに実習に取り組ませたいとの願いから、後期の「保育実習指導」において「実習レポートを生かした取り組み」を模索しながら実施した。これは、その実践報告である。

2. 大学教育におけるレポート指導と双方向性の授業

大学生の勉強と言え、まずレポートを書くことが上げられる。レポートは、学んだことを中心にまとめて書くので（例えば、講義を聴いてまとめる。あるテーマについて調べ、自分の考えを述べるなど）、書き上げるまでに意味があり、評価の対象となることはあっても、提出後にそれが生

山 森 泉

かされる機会は少ないのではないだろうか。また、レポートを担当教員が添削して返却したとしても、書き直しを要求することやそれを元に検討することはほとんどないであろう。レポート指導にはかなりの労力と時間を要するが、各人の興味・関心事が異なるため、完成後もなかなかクラス全体の共通の問題とはなりにくい。

しかし、近年大学教育においてはレポート指導も含めてさまざまな授業改革が試みられている。筆者が目にしたものはそれらの一部でしかないが、触発されたものに以下に引用した試みがある。楠原 彰氏（國学院大学）は、「レポートなんかも返せばいい。それから学生の意思表示、反論の機会、方法を工夫する。それは授業の終わりにコメントを書いてもらうのが一番いい。（中略）このコメント方式のやり方で学生たちが最も評価するのは、他の受講生（つまり「隣のやつ」）の考えを知ることができるということです。教師の意見などよりも、学生たちは口も利きあつたこともない隣の学生の考え方に触れて一喜一憂するのです。コメント用紙を読んだの、彼らの一番多い感想は、『ああ、こんなにみんな真剣にものを考えているのか。自分の意見をしっかりと持っている人がこんなにいるなんて！』というものです。」と述べている。（註1）

山本 浩氏（上智大学）は、授業の中で課す二種類のレポートについて述べている。ひとつは自由な意見を書いてほしいという形で要求する感想レポートで、「教室では積極的ではない学生もいろいろな意見を書いてきてくれてこちらもなるほどと思うことがしばしばあります。本当のことを言えば、そのような意見交換が授業の中で積極的に出てきて、活発な意見の交換が行われればよいのですが、なかなかそのようにならないので、そこへ行く一つ前の段階ということで、このタイプのレポートを書かせております。」また、もうひとつのレポート、本格的ないわゆる研究論文のようなものを要求するときには、「こういうものを書いてほしいという課題を相当にスペシフィックに出すのがよいということが経験的にわかってきました。（中略）そもそもレポートは授業の一環として行われるわけですから、教員としては当然何らかのねらいがあってレポートを要求するはずであって、『この小説についてレポートを書きなさい』という漠然とした課題はありえないはずです。」（註2）

さらに栗田充治氏（亜細亜大学）は、二百数十名の学生にあるテーマで書かせたレポートのうち内容のしっかりしたものを百名程度選び出して人数分より多めにコピーをし、それらを各人3名以上取り上げて批評文を書くという授業を展開している。この紙上討論に対する学生の感想では、「もう少し考えてみようという気になったとか、レポートなんかは他の授業でもあるが、人のレポートを読むこととか批評するということでも学べるんだということを改めて実感したとか、今までやったことのない初めての方法だったとか、面白かったとか、授業に参加しているという感じがある、やり甲斐があるとか、（後略）」と述べている。（註3）

また、「大福帳」を使った授業実践では、学生が教員のコメントを歓迎している旨が書かれており、その他にも一方的ではない双方向の授業展開（提出課題も含む）のあり方にも示唆を与えられた。（註4）

では、実習レポートはどのようなだろう。上記の授業実践報告などから、筆者自身も授業の中でのな

んとか取り上げられないものかとの思いを抱いていた。「保育実習」に関して具体的にどうしたらよいのか、実際に取り組んでやりきれぬのか。自信は皆無であり、学生がどう反応するかも予測できなかった。

3. 現在の学生気質

5月末から6月はじめにかけて、学生たちは自分が実習をする保育所に半日の参観実習という形で、3歳未満児の子ども達を観察してきている。その折のアンケートでは、実際の子ども達に接して保育者になりたい気持ちが強まる学生も40%いるが、一方で15%の学生に保育者になりたい気持ちへの揺らぎが早くも出てきている。(グラフ参照)

自信をなくした学生のコメントでは、

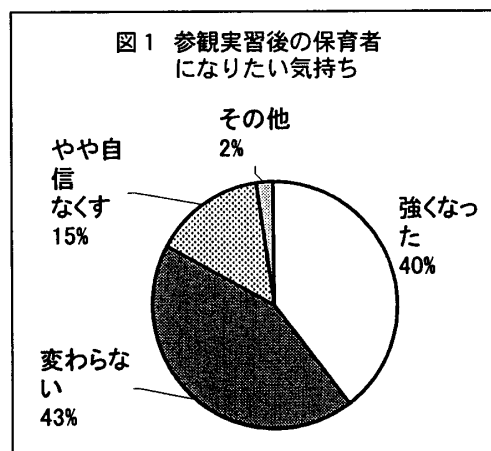
- ・自分が保育者に向いているのか疑問。
- ・子供への接し方がわからない。
- ・次回の実習がとても不安になった。
- ・思っていた以上に大変な仕事だ。
- ・保育室に入ったら子供に泣かれた。
- ・実際の保育士の仕事を見て自分はこんなにできない。

など、不安に思う気持ちが強く現れている。たった半

日の参観でさえこれほど不安に思う学生達が5日間通し

の実習の中で自分の気持ちをコントロールできるのか、自信をなくしてしまうのではないかとの懸念を抱かざるを得ない。また、最近の学生はこのような気持ちを直接誰か(例えば、実習指導担当者、アドバイザー、友人など)に相談することも苦手である。

実習を終えて意気消沈しないために、一人で悩みを抱え込まないためにどうしたらよいか。その対策の一つとしても課題レポートの位置づけがある。



II. 1. 課題レポートの意図

多くの「教育実習・保育実習」関係の本の中では、自分の実習体験を振り返り総括するものとして、レポートを位置づけている。(註5) さらに、お互いの反省や体験を出し合い、ともに学び学習する場として反省会・報告会を設定している。(実習報告会実施校は76.9%—註6) 本学科でも2年生は教育実習、保育所・施設実習の報告会が年間計画に予定されて実施されている。1年生に関しては単独の報告会はない。そこで、12月の実習につなげるように学生の意識を方向づける意図で、

- (1) 実習した園の雰囲気
- (2) 担当したクラスでの印象的な出来事
- (3) 12月に実習までに身につけておきたいと思ったこと

の3項目からなるレポート「保育所実習を終えて」を課した。各項目の意図するところは、

- (1) では、園の様子を把握させることで、学生に全体的な視点を持ってもらうことである。初め

山 森 泉

て担当するクラス、特に未満児クラスでは、「かわいい赤ちゃん」にばかり心を奪われて、自分が担当した子どもしか見られなくなることが予想される。また、園によって方針も雰囲気も異なるので、最初に実習した園がどうしても印象に残ってその園のやり方しかないと思いつくことを避けるためでもある。

(2) では、学生自身が実習体験を振り返った時に、当時の熱い思いを再現できるようにするためである。実習日誌を毎日書いていると、その日その日の出来事の記述で終わってしまい、全体としての総括にはなりにくい。7月末の実習終了後にどんなに意欲的になっていても、夏休み中にその意気込みや感動が薄れてしまうと、後期の授業でその思いを生かすににくい。担当者としても、個々の学生がどのような出来事を体験しているのか、どのように自分の言葉で語っているのか、興味を引かれるところである。また自信喪失した学生がいるとすれば、どのような体験によるものなのか、その気持ちを受け止め指導する機会を持つきっかけにもなる。

(3) は、体験の中から自分の課題を探すことで、後期の授業への取り組み姿勢を学生、教員ともに明確にできるうえ、授業の中でも自己の課題を意識することで、12月まで気持ちを持続できるのではないかと考えたからである。

2. レポート提出と再提出指導

1年生は8月末の学年登校日を提出期日とした。この時に提出させたものは実習日誌、実習先への礼状コピーとレポートである。

礼状は12月に再度実習に行く旨を含ませて書くように指導し、そのコピーを担当で保管することで、実習園とのつながりを学生の意識の中に残しておくねらいもある。

提出されたレポートにざっと目を通し、レポートの形式を守らず項目なしで書いてきた学生には、形式通り書き直すように求めた。この時、形式を守らずに書いてきた学生と自分で気づいて書き直した学生とのやり取りでは、項目毎に書いたほうが書きやすかったとのことである（何を書くのかははっきりしているから当然のことではあるが）。友人のその発言を聞いて、書き直しの指示にも学生からの文句はなかった。枚数の指定はしていなかったが、多くの学生は表紙を除いてレポート用紙2～3枚の分量となった。レポート用紙1枚におさなりに書いた学生がひとりいたので、極端に短いこと、具体的な記述がないことを指摘して再提出とした。それ以外はおおむね指示通りにレポート提出ができた。因みに形式を守らなかったことで書き直した学生は14名であった。また、レポートの下読みをした段階で、内容的にも物足りない書き方の学生も3名ほどいたが、目をつぶった。教員に言われていやいや書き直しをするよりも、他の学生のレポートを読むことによって自分で足りない点に気づく方が効果的だと判断したからである。（この結果についてはⅡ. 5. ⑦、Ⅲ. 2. 参照）

3. レポート内容と読後の印象

レポートを読み始めて感じたことは、それぞれが初めての体験のなかでいろいろな気づきや学びをしており、実に生き生きとした文章になっていることである。筆者は数年県の感想文コンクール

の審査員を務めたことがあり、各学校の代表として送られてくる多くの優れた文章に接する機会を得ていたが、それにも劣らない文章力であった。それは自身の体験に裏うちされた誰のものでもない文章だったからである。失敗の体験も上手くいった体験も語らずにはいられない思いが伝わってくる。

(1) の園の雰囲気では、保育室の配置や装飾などの具体的描写をしたものと、保育者同士の人間関係（主として連携、協調性）や園児たちとの関わり方、保護者との緊密な連絡、コミュニケーションなどの人間関係について着目したもの、園舎や玄関に入った時に受けた印象をイメージとして述べたものに大きく分類できる。全員が各々の実習した園の雰囲気を、肯定的なイメージでとらえて表現していた。また、保育方針にふれたレポートもあった。いくつかを以下に抜粋する。

- ・本当に明るく、とてものんびりした空気が漂っていた。
- ・子ども達は、玄関で子ども達を迎える保育者の目をしっかり見て、明るく元気に挨拶していました。（中略）子どもも保育者もきちんと挨拶が出来ている園で、保育者はいつもニコニコしていてとてもよい雰囲気でした。
- ・朝の出迎えの時間などほんの短時間でも保護者との関わりを大切にされていて、常に笑顔で出迎えていた。（中略）保育士はもちろん園で働いている皆が明るい雰囲気なので、子ども達も安心して過ごしているように感じられた。
- ・私がこの園に入ってすごくきれいだなと思ったのは、毎日先生方がきれいに掃除をしていらっしゃるからなのだと思います、私も一生懸命掃除をしました。
- ・D保育園は建物やカーテンなど白や淡いピンクなどを多く使っており、とても温かいやさしい気持ちで保育することが出来た。（中略）とてもアットホームでまるで大きな家族のような保育園だった。
- ・とても大きな保育園ですが、（中略）和気藹々としていました。（中略）Y保育園は本当に笑顔が似合う素敵なお保育園です。
- ・Y保育園は子どもにとっても保育者にとってもとてもよい環境だと感じた。（中略）子ども達が快適に過ごしているので、先生方も快適に楽しく過ごしていらっしやっと思ったと思う。だから、園はとても明るい。そんな園を象徴するかのよう、園の至る所から太陽の光が入ってくる。

(2) の具体的な出来事については、実にさまざまな体験が書かれていた。中には、その場面にいるかのように状況がよく分かる臨場感あふれるものもあった。また、子どもに受け入れてもらえなかったショックな体験を語ったものや、おもちゃの取り合いで間に入ってどうしてよいかわからず困った体験をつづったものなど、自分なりの洞察が見られるものも多かった。

(3) の課題はいくつかのパターンに分類できるが、多くは、手遊び、絵本読み、言葉掛け、けんかの対処などである。そのほか、積極的に取り組むことを挙げた学生もいた。

4. 読み合わせへの準備と導入

筆者がレポートを読み出して見ると、その内容が予想以上に良かったので、もう一人の担当者に

山 森 泉

相談し、学生が互いのレポートを読み合う機会を授業で設けることにした。しかし、いきなり実施しても難しいので、後期の授業の予定を立て、2回目、3回目を当てることにした。

レポートの指定項目にはないことがら（園から苦情を言われたことなど）を「その他」として書いてきた学生がいた。このため、他の学生にもレポートには書かなかった悩みなどがあるのではないかと考え、後期の授業1回目は、今後の授業予定の説明とアンケートでの悩み調査（食事を取れたか、充分睡眠がとれたか、実習中の欠席遅刻早退の理由、実習で困ったこと）とを行い、食事が取れない、園を変わりたいなどという学生の悩みを聞くことを行った。

一方で2年生の実習報告会（保育所・施設）を10月の2週目に開催する準備として、保育所はアドバイザー単位で、施設は種別ごとで、事前に話し合いの時を持つことにした。2年生にも「保育所実習を終えて」のレポートを課していたので、それを導入に使ってもらうことにした。2年生の項目は、(1)(2)は1年生と同じだが、実習の総まとめの意義付けから(3)は「教育実習、施設実習と併せて（比較して）思ったこと」とした。これまではすぐに話し合いから入っていったが、まずレポートを読み合うことを各アドバイザーに依頼し、5人分読むための記入用紙を配布した。2年生のレポートの読み合いが1年生と異なる点は、お互い誰が自分のレポートを読んだかわかることである。既に1年次の実習、2年次の教育実習、施設実習、保育所実習を終えていながら、保育園の様子（印象）では、新たな発見があったようだ。筆者のアドバイザーグループの中でも、読んだ時に直接本人に感想を言っているケースもあった。このようにしてレポートを読み合ってから話し合いでは、全員がレポートを読んだことで、視野が広がった。いつもは発言力のあるメンバーに偏ることもあるが、今回は全員がほぼまんべんなく発言できた。発表原稿にまとめる時も、「○○さん、～とかの工夫がよかったよね。どうやったの？」と意見交換や質問にも発展していった。他のアドバイザーグループでも特に問題はなく、回収した記入用紙には、5人分のレポートを読んだコメントがしっかり書かれていた。2年生での読み合わせがスムーズに実施できたことで、1年生でもできるのではないかと少し見通しが立った。しかし、12～13名の顔見知りのグループ内で読み合うことと、120名余のお互いまだ名前も知らないメンバー全体で実施することとの違いに若干の不安はあった。問題は、導入をどうするか。レポートの交換をどのように行えば混乱しないかである。

実習報告会を実施する同じ週の金曜日の「保育実習指導」の時間に、1年生のレポート読み合わせを実施する予定にした。報告会を1・2年生合同で実施するのは、前期の教育実習報告会に続き2度目である。月曜日に報告会を実施し、「実習報告会に参加して」のレポート提出を2年生は水曜日に設定した。そのレポートの最後の項目を「実習報告会での自分の役割を終えて」とし、次の内容を指示した。

- ・発表者、原稿を書いた人、グループでの纏め役をした人、司会、タイムキーパー等の役割をした人は、具体的にしたこととその感想。
- ・それ以外の方は、自分がどのような気持ちでこの会に参加したか。（1年生の時と比べて、どのように成長していると感じたか。）

である。回収した2年生のレポートにざっと目を通した中で、1年生に伝えたいメッセージを2、

3選んだ。これを1年生のレポート読みあわせの導入に使うことにした。

1日の最後で、しかも1週間の疲れが溜まっている金曜日の8限目というあまり好ましいとは言えない時間帯であったが、横に10人並ぶ大教室で実施することにした。

まず記入用紙(A3)を配布し、実習報告会での1年生の聞く態度がよかったことと、「実習報告会に参加して」のレポートから2年生のメッセージを伝えた。

- ・みんなの意見をまとめるのは大変で苦労した。伝えたいことが山ほどあって時間内におさめるのも難しく何度も書き直した。けれども良い経験をさせてもらえ、人前で話すということに抵抗がなくなったように思う。1年生も寝ずに真剣に聞いてくれ、発表している側も発表しやすく、自分の中では100%の出来だった。
- ・この報告会で自分がまだ実習に行く前の不安なことや心配なこと、まだ先のことだからとのんびりしていた1年生の頃を思い出すことが出来た。今の1年生もきっと不安なことではいっぱいだろうと思う。自分が懐かしく思え、実習を終えた自分がスゴイと思える。1年生の時にはもしかして2年生になれないかもしれない自分がいて、実習にも行っていないんじゃないかなど考えていたこともあったが、今後の段階(就職)に向けて頑張ろうとしているのが不思議だ。めげずに頑張ろうと思う。

次に、なぜ読み合わせをするのかという意図を説明した。

ア、実習レポートがどれもすばらしく、教員だけが読むのではもったいないこと。体験を共有しよう。

イ、保育園毎にいろいろなやり方がある。就職してしまつたらなかなか他の園の保育を知る機会はない。自分が実習した(体験した)保育だけが全てではないことを知ってほしい。

ウ、失敗して上手くいかなかったと思込んでいる人がいるが、それは自分だけではないこと。

同じように失敗した人がどのように工夫したかなど、お互いの失敗から学べることがあること。

そして配布する時に、列ごとに10人分のレポートを配布するので、誰のレポートかなどと選ばずに、上から順に取って横の人に回すこと。読み終わったら静かに同じ列の中で交換することだけを指示した。長いレポート短いレポートさまざまなので、実際にかかる時間の予測がつけられず最大10人分書き込める枠を作った。こちらの思いとしては5人分を理想と考え、用紙には「最低5人分は読みましょう」と記しておいたが、実際には「必ず4人分を読むこと」とした。

この時の用紙には、(誰のレポートを読んだのかを記入する)氏名、保育園名、「気づいたこと・感心したこと・共感したこと・その他」を記入する枠を設け、最後に「他の人のレポートを読んだのまとめ」を13行程度書く欄を設けた。

5. レポートを読んだ感想類型

回収した記入用紙を集計してみると、4人分読んだ学生が52名、以下5人分:64名、6人分:8名、7人分:2名、最高は9人分:1名である。

「他の人のレポートを読んだのまとめ」で、多くの学生が書いていたことをまとめると、だいたい次のようになる。(回収126名中、自由記述の表現から筆者が項目に分類した。)

- ①悩んだり失敗したりしたのは自分だけかと思ったら、他の人も同じように思っていたので安心した。半数近くの56名（44%）
- ②他の人のレポートを読むことで、他の園の様子や雰囲気、自分が担当しなかった〇才児の様子がわかった。子どもへの対応に困ったときにいろいろなやり方があることがわかった。49名（39%）
- ③自分と同じような体験があり、共感できた。場面が頭に浮かんだ。48名（39%）
- ④12月の実習に向けてみんなが頑張ろうとしているので、私も頑張ろうと思った。36名（29%）
- ⑤自分が気づけなかったことが他の人のレポートでわかった。新しい発見があった。30名（24%）
- ⑥自分のレポートを読まれることはいやだったが、見せてもらってよかった。もっと他の人のレポートを読みたい。23名（18%）
- ⑦レポートの書き方を見習いたい。21名（17%）
（以下は10%以下の割合なので、数値は省略する。）
- ⑧同じような体験でも人によって感じ方や捉え方が違うことがわかった。おもしろい。
- ⑨いろいろな人と情報交換し合って共に学んでいきたい。一緒に保育士を目指そう。
- ⑩みんなが実習を通して成長していることがわかった。
- ⑪実習直後に感じていた気持ちを忘れそうになっていたが、レポートを読んで努力しようという気持ちが再び出てきた。
- ⑫授業をどれだけ真剣に聞いているかの差が出ていた。もっと授業を吸収したい。
- ⑬どれも素敵なレポートで心があった。熱い思いがある。

6. レポート発表の試み

回ってきたレポートは自分では選べないので、たまたま読んだ中に質の高いものがあるとは限らない。失敗体験が書いてあるとも限らない。

筆者の一番の意図は、実習が大変だったのは自分だけではないということを知ってもらうことでもあるので、第二段として代表者にみんなの前で読んでもらうことを計画した。誰を代表とするかは、担当者二人で読み、意見の一致したところで伝えたい内容がはっきりしているものとした。その結果14人。敢えてレポートの内容は直さず、そのまま読んでもらうことにした。

時間配分の関係で、14人分を筆者が音読してみたところ、短いものは2分弱、長いものは8分強、大体4分前後が多く、全部で60分かかる。本来の授業時間は45分なのだが、幸い同じ日の3・4限目に休講が出たので、その時間を当てることにした。

当日学生にはA4の記入用紙を配布したが、そこには前回実施した「他の人のレポートを読んだのまとめ」の代表的なものを列挙した（Ⅱ. 5. の①～⑧）。また今回聞く時には、必要ならメモを取ってもよいが、逐一書く必要はない。聞くことに集中するように言った。というのは発表する姿勢を見て良くも悪くも学んで欲しいし、筆記する音がカリカリ響くと発表者も発表しにくいと思ったからである。そのため、感想を書く欄は少な目（8行程度）にした。さらに、レポートを読み

合うことと発表を聞くことを学生がどう受け止めたのか、次回以降実施できるものかどうかの懸念もあり、簡単なアンケートも付けた。本当はいやでたまらないのだが、言う機会を持たない学生の声に耳を傾ける意味もある。したがって「これは本音で書いてほしい」と一言添えた。(アンケート内容・集計結果は後述)

Ⅲ. 1. 学生の反応

授業の中で実際に「レポートをお互い読み合います」ということを言った時に、声に出して「いやだ」という反応をしたのは筆者が把握したのは1名、それも小さい声だったので、他の学生がそれに呼応することはなかった。予想外の無抵抗?状態のなかでレポート読み合わせは始まった。実際、読み始めるとシーンと静かで、一斉に下を向き、必要なことをメモし、読み終わったら同じ列のメンバーと無言で交換し、次を読み始めるという具合であった。これまで「保育実習指導」の時間にこれだけ集中して熱心に取り組んだことはなかったので、全く私語のない学生達の姿に、思わずビデオで録画して他の教員にも見せたいと思うほどの集中であった。同じ列の中に、レポートを読み終えている学生がいない場合は、静かに回りを見回し、近い所の学生と無言で交換し合っていた。遠くて手が届かない時だけ、担当者二人が橋渡し役となった。目安の終了時間近くになり、4名以上読み、まとめの文章も書いた人は提出して帰ってよい旨を伝えた時にも、ざわつくことなく静かに帰っていった。また時間内に4人分を読めなかった人、もっと読みたいと言う人には、5時まで時間を延長した。

発表に関しては、発表者の選定がぎりぎりだったので、学生に伝えてレポートを渡したのは前日であった。筆者は1年生には前期授業で「日本語表現法Ⅱ」を担当し、主として音声コミュニケーション、つまり、スピーチ・電話(実習の件で保育所に電話するケースを中心に実施)・絵本読み・断りや依頼の仕方などを演習の形で担当してきた。それを実践する場としての意味もあって充分練習させたかったのであるが、「である」体で書いたものをそのまま読んでしまう学生もいた。「ですます」体に直し、自分の感情をストレートに表現した箇所は省いて読み、分かりやすい表現に直した学生もいた。当初、発表前日や当日の昼までの休み時間を使って読みの練習をする予定を組んだが、時間割の変更で練り上がり、実際には3人しか出来なかった。このように、練習十分とはいええない読み方だったのだが、実際には話し声一つなく、1年生全体が静かに真剣に聞いていた。これも筆者の予想以上の熱心さだった。

2. 学生の感想

読み合わせ・発表と、2回とも各自の感想を自由に書いてもらった中から、以下に抜粋する。

1) 読み合わせの感想から

- ・最初自分のレポートを人に見せると聞いたとき、嫌でした。そんなつもりで書いていないのに……と思いました。しかし今は読んでよかったなと思います。「私だけなのかな……」と不安に思っていたり悩んでいたりが他の人のレポートを読んでみると、みな同じことを思

っているのだなということがわかり安心しました。でも安心してばかりではいけないと思います。不安や悩み事をしっかり解消して12月の実習に臨みたいと思います。他の人のレポートを読んでみて「この人はこんなことも考えているんだ」と感心するところもありました。そういうところを見習いたいと思いました。他の人のレポートを見るということは勉強になるし、いいことだと思いました。

- ・レポートの書き方も感心してしまうようなものがあって、手抜きはしていないけれど、自分のレポートの書き方が未熟だと改めて気づかされました。また実習を終えてだいぶ時間が経ってしまっているので、そのときに感じていた気持ちを忘れていました。これらを読んで、次回の実習に向けて努力しようという気持ちが再び湧いてきました。
- ・私はレポートの形式を間違えていて、再提出になりました。そのこともあり、最初のレポートを書いたときに比べて実習内での細かいことを忘れてしまい、2度目のレポートはいい加減なものになってしまいました。今他の人のレポートを読んでみて、みんなとても真剣にレポートを書いていることを実感し、手を抜いたレポートを提出したことをとても後悔しています。今日読んだレポートの中には、同じような経験をして同じことを実感した人が何人もいました。みんな心のこもったレポートばかりでした。次の実習レポートは自分にとって意味のあるものにしたいと思います。
- ・他の人のレポートを読んで見て、どの人もとても熱い思いが伝わってきて、読むことができよかったなと思いました。読んでいるうちに自分もそんなことがあったなとか納得しながら読めたのと同時に、もし私だったらどうなのか、どのような対応をするのかと考えることができました。読んでいる中には私には真似できないようなことが書いてあり、このような対応をすれば子どもは喜ぶんだなと少し勉強になりました。授業を生かした実習をしている人もいて、私ももっと授業をよく聞き、実習に生かしたいと思いました。今日読んだ人のレポートを参考にし、頑張りたいと思いました。

2) 発表を聞いた感想から

- ・Tさんの「失敗しても良いから実習を通して学んでいきたい」という言葉にすごく気持ちが楽になった。私はなんでもちゃんと出来ないと気がすまないの、失敗するとすごく落ち込んでしまう。この言葉を聞いて、失敗も自分の糧になることに気づき、次の実習への頑張る意欲が湧いた。
- ・みんなレポートをまとめるのが上手だと思った。その人が感じたことが伝わってくる内容ばかりだった。私も上手くレポートを書けるようになりたいと思った。(略) 一人一人いろいろな悩みや思いがあるのだと感じたし、私も頑張って保育士になろう！と、みんなのレポートを聞いて改めて思った。
- ・自分だけじゃない、他の人も同じなんだ！という気持ちになりました。みんな頑張ることがとても大切なのだと思いました。このレポート発表のおかげで保育士になりたい気持ちがもっと強くなりました。

実習レポートを生かした共感的学習の試み

- ・私は保育実習を終えてから、ちゃんと保育士になれるのか、それ以前にこのまま保育学科にいていいのかなど、本当に保育者になりたいのかどンドン不安になった。けれど発表を聞いてみんな同じ思いだったのかと安心した。(略) またレポートの書き方を学ぶことが出来てよかった。こうやって報告していくことで、みんなの気持ちが高まったり学ぶことが出来たり、自分のためになっていくと思う。
- ・自分の印象的な出来事は、絶対レポートに書こうと思いました。みんなそこから学んでいき、次からはこうしようと一歩ずつ成長していくんだなと思いました。(略) 発表を聞き、また改めて自分の実習はどうだったかなと考える時間を持ってました。2年生の経験を積んだ発表も良いけれど、同じ苦勞をした仲間の発表も良いなと思いました。
- ・発表を聞いていて、自分が実習に行った園のことを思い出しました。自分の受け持った子どもの顔がどンドン浮かんできて、とても会いたくなりました。
- ・レポート発表の中で「～のことが嬉しかったです」というたびに、自分も嬉しかったことを重ねあわせ、とても幸せな気持ちになりました。早く12月になってもう一度保育所に行きたくなりました。
- ・いろいろな人の発表を聞いてとても関心を持ちました。私が体験していないことも、レポートを聞くだけで、その人が困った場面、嬉しかった場面を想像することができました。人に想像させることが出来るレポートを書けるようになりたいです。
- ・もっと仲間のレポートを読みたい！聞きたいと思いました。そして話し合いたいと思った。(略) 授業ではまだまだ自分を捨てきれず恥ずかしいと思う気持ちのほうがはっきり言って大きいです。しかしこれだけの「学んだ」という気持ちを持ち、これから前進していこうという思いの仲間がたくさんいるのだから、もう少し恥をかいてみようかなと思った。
- ・実習レポートを読んだり聞いたりすることは自分の思いを知られて恥ずかしいと思うだけかと思っていただけ、他の人のレポートを知ることはいいことだと思った。

3) 肉声の効果

- ・一人で読む時と書いた本人が読んで聞かせてくれるのでは、また違ったことが発見できることも分かりました。(略) 素直に書かれているレポートを声に出して読み聞かせてもらうことで、またさらに気持ちを理解することに近づけたかなと思いました。本当によい時間でした。
- ・聞いていてその場面が目浮かぶようでした。目で読んでいると、どうしても自分のペースになってしまうけれど、その人のペースで読んでいるのを聞いているとすごく落ち着いて聞けたと思います。
- ・本人が声を出して読んだものを聞くと、なぜかその人の気持ちやその場面がよくわかってきて不思議と聞き入っていました。
- ・前はただ読み会うだけだったけれど、今回いざレポートを書いた本人がみんなの前で発表することによって、改めて共感できることがあったりして、とても心に「じーん」ときて感動しました。

3. 終了後のアンケート結果

レポート発表後に、以下の項目でアンケートを実施した。(1)(2)の項目は複数回答可能だが、指示が徹底しなかったため、一つしか選択しなかった学生もいる。回収総数は125名だが、この部分に全く記入のない学生も数名いた。(選択肢は見易さを考慮し、多い順に並べ替えた。)

(1) 読む前の気持ち	嫌だった 45 読みたい 24 おもしろそう 11 その他 3	恥ずかしい 30 別に 18 意味があるのか? 9
(2) 読んだ後の気持ち	勉強になった 57 安心した 27 自分も頑張りたいと思った 23 もうしたくない 2	読んでみてよかった 38 みんなの頑張りがわかった 24 もっと読みたい 15 その他 2
(3) 読む時間	ちょうどよい 85 長かった 5	短かった 30 その他 0
(4) 読んだ人数	適当 79 もっと少なくてよい 5 その他 0	もっとたくさん読みたい 34 全員の分を読みたい 3
(5) レポート発表人数について	適当 77 各自読むだけで発表は必要ない 12 (うち発表者 3) もっと少なくてよい 11	もっと発表を聞きたい 19 その他 0

(1)の「その他」は、「そんなつもりでなかったのであせった」と「面倒くさい」2名である。また、(2)の「その他」は、「こういう事も書けばよかったと思った」「できれば匿名に」である。

(2)の「読んだ後の気持ち」で、「もうしたくない」を選んだ2名のうち、1名は「もうしたくないけど、読んでよかった」と記述していた。もう少し多くの「もうしたくない」がいると予想していたが、アンケートの集計結果や感想を見ると、互いのレポートを読み合う試みは受け入れてもらえたと言える。また、「勉強になった」「読んでよかった」「頑張りたいと思った」という前向きな意見が多いことは、今後への明るい展望である。

IV. 1. 共感性と気づきによる学び

筆者の指示は、「まとめの文章を書いてください」のみだったが、全体的に非常に前向きな姿勢で書かれていた。教員が見ることを意識しているとは思いますが、ほぼ全員の文章が肯定的、意欲的な感想だった。こんなことをして何になるのかといった表現はなく、発表では聞き取りにくい学生の発表も2、3あったのだが、それに対しても「こういう読み方をすればよい。」「声の明るさ、顔をあげて読むことが必要」とアドバイスの書き方が主だった。

筆者の予想以上に感想に書かれていたことは、本人の肉声で聞くことの臨場感である。音読することにより、自分で読む以上に情景が浮かぶような気がしたと何人もの学生の感想にある。これは、聞くことに集中した効果もあると思われる。

園ごとに雰囲気も方針も違う保育所実習の体験はきわめて個人的な体験であり、誰一人として同じ体験はない。同じ実習園であっても、クラスが違えば指導担当者が異なり、園児の年齢も違う。他の実習生は何をしているのかを見ることができない。実習体験を話し合おうとしても、毎日の実習日誌の記録や疲れで、発展的な会話まではなりにくい。しかし、レポートを通しての個人との対話なら、充分可能である。

今回、初めての实習で自信を喪失した学生もかなりいたのだが、互いに共感し安心することで、頑張っテ成長していこうという気持ちを持つことが出来た。

次はその一例である。同じ学生の、(A)はレポート読み合わせ後、(B)は発表を聞いた後の感想である。

(A) 私は自分の実習日誌は足りないところがあるなと思いました。少ししか書いてない部分や場面を良く思い出したら、もっとたくさん書くことがあったのではないかと思います。他の人のレポートは細かく書いてあるのが多くて自分も是非見習いたいと思いました。感心したのは先生方の表情や部屋の雰囲気、つくりなどをともしっかり書いてあるということでした。自分と園児のふれあいを書いている人もいたし、先生と園児のふれあいを書いている人もいて、かなり勉強になりました。園によってやることも全然違って私自分が体験したことをしっかり記録に残したいなと思いました。

(B) 「全体を見て配慮したい」と言っている人がいました。私はその人は本当に大きな目標を持っているのだなと思いました。私は先生に少し注意されただけでマイナス思考になってしまうので、注意されたことを生かして実習したいと思いました。一歳児などを担当した時、言葉が通じないからいいかげんに対応すればいいのではないと言っていた人もいました。私は本当にそのとおりでなあとと思いました。自分でも一歳児を担当していて、いい加減な対応になっていた時があったと思います。そんなところも先生は見抜いていたのだと思います。その上で私にいろいろアドバイスして下さったのだろうなと思いました。

このように、互いのレポートから学びとろうとする姿勢の中で、自分のレポートや実習姿勢を反省する記述も生まれている。また、レポートを読んだ時と聞いた時の2回の間でも、自分なりに新たな気づきがあり、考えを深めている学生もいる。

2. 配慮すべきことがら

『保育士養成資料集』第36号によれば、「実習日誌・レポート」の点検を重視して実施することにより、実習における「目的・機能の理解」「子ども・生活の理解」「一日の流れと生活の理解」の項目と関連が深く、各項目の達成度が高いことが統計的に裏付けられている。(註7)

だからといって、レポート読みはいつでもやれることではない。教員が事前にすべてのレポート

に目を通し、何が書かれているのかという内容の確認をしておくことが必須である。個人のプライバシー、深刻な悩み、問題は受け皿として聞く機会を別に設けることも必要となる。また、発見、共有できる個人的体験があることが前提で、文章のうまさは必要ない。内容的に学びあえるものでなければならず、批判するばかりの内容に乏しいもの、ほとんど同じ内容のものでは効果がない。そのためには、レポートの項目をきちんと立てて、書く時に書きやすく、同じ観点から読みやすい構成にしておく必要がある。また、誰が自分のレポートを読んだのかを気にしてばかりでもよくない。筆者達は、AクラスにはBクラス、BクラスにはAクラスのレポートを読ませるよう配慮した。発表者も両クラスから選ぶことが望ましい。今回はそのことを十分に意識していなかったのだが、選んだ結果としてAクラス5人、Bクラス9人となり、当日発表者に欠席があったため、実際にはAクラス4人、Bクラス7人だった。

今回、レポート読み合わせに引き続き、内容面で14人の発表者を選んだのだが、同じ園で実習した人が二人ずつ、二つの園に重なったのは良くないと学生からの指摘にあった。実習園は全部で31園なのだから、確かに、いろいろな園の雰囲気を知るという観点からは外れてしまい、配慮が足りなかったことを反省した。これは次回以降ぜひ考慮しなければならない。

3. 終わりに

保育実習事後指導に求められることを模索していく中で、他の指導者達の声にも耳を傾けたい。「知識」も大事だが、何より「実習に行く」ことへのモチベーションの高揚をどのように図っていくのが重要」「学んだことを整理し、問題点を明確にし、実践と理論の統合を目指すことが大切」「実習を効果的に行うためには第一に実習に対する不安を軽減し、実習で自分の実力を発揮できるようにすること」など、うなずけることがある。(註8)

今回の実習レポートを用いた試みは時期的にもタイムリーで、モチベーションを持続させ、薄れかかっている学生には再燃させることが出来たようだ。7月末に実習を終え、8月末にレポート提出をする。9月に幼稚園参観をし、10月から後期授業が開始される。その最初の行事が2年生による「実習報告会」であった。そして「聞く」側から「主体的に学ぶ」側に立ってレポートの読みあわせ・発表を行うことで、12月の実習につなげることが可能になったと言える。さらに、自分一人だと思っていた実習への不安や悩みを共有し、無用な心配を取り除くことで、頑張ろうという気持ちを持つことができた。

実習報告会では発表グループごとに代表的な体験にまとめるので、個人の強烈な体験が薄れてしまうことが考えられる。また、1年生に聞かせることを意識するのでどうしても教訓的発表になりがちである。口頭発表であるから聞くことに集中し、自分の実習や失敗の体験と合わせて考えるゆとりはない。その点、「レポートを読む」ことは自分のペースで進められるので、あるエピソードのところで、自分はどうだったか、自分ならどう対応したかを、手を休めて考えることが可能である。

グループごとに話し合い、問題点をはっきりさせてまとめ、耳で聞く実習報告会との違いを押さえた上で、それぞれの良さを生かした実習事後指導の時間の持ち方を検討し続けていきたい。聞く

ことと読むことの違いについてもより効果的にそれぞれを取り入れていく必要がある。

以上述べてきたように、実習体験という個人的なものを全体のものに生かすことの成果を見ることが出来た。それを達成率何%というような数値で示すことは出来ないが、学生の感想や授業中の姿勢が確実に物語っている。1回目の今回は試行錯誤で何でもやれたが、2回目以降は学生が教員以外の人に読まれることを意識して書くため、自分の思い（心情）を押さえてしまうことが予想される。また、恥ずかしい失敗は書けないという意識が働くかもしれない。

しかしながら、個人の不安な思いを自分だけでなかったと知り、同じ仲間の体験から学べることを実感しただけでも、この試みの意味はあったと思う。実習中は次から次へと時間に追われ、目の前の子どもの対応優先で臨機応変に行動しなければならない。実習の事後指導の時間だからこそできることの一つとして、今後も検討を深めていきたい。

付記：「保育実習指導」の授業におけるレポート指導に関しては、筆者が中心になって進めてきたので代表してこのような形でまとめることにしたが、年間を通して細田講師とのチームティーチングで授業を進めており、新しい試みもすべて相談・検討のうえ実施してきた。したがってこの授業の成果はあくまでもチームティーチングの上に成り立つものであることを明記しておく。

引用文献・参考文献

- 註1：「授業はむずかしい——学びへの誘い」日本私立大学連盟編『大学の教育・授業をどうする——FDのすすめ』東海大学出版会 1999年 82ページ
- 註2：「レポート指導の試み」日本私立大学連盟編『大学の教育・授業をどうする——FDのすすめ』東海大学出版会 1999年 117-121ページ
- 註3：「大人数講義における紙上討論の試み」日本私立大学連盟編『大学の教育・授業をどうする——FDのすすめ』東海大学出版会 1999年 164-168ページ
- 註4：伊藤秀子・大塚雄作編『ガイドブック大学授業の改善』有斐閣 1999年186-191ページ：
「大福帳」と名づけたカードを導入して毎回の授業に活用することで、学生との1対1の文章による会話が保証され、「形成的評価」を取り入れた授業改善につながったという。
田中 一著『さよなら古い講義：質問書方式による会話型教育への招待』北海道大学図書刊行会 1999年：これによれば、著者は「質問書方式による会話型大人数講義」を行い、毎回の授業の質問書に記入された疑問に対し、翌週の授業に配布する「回答書」で答えるという方法で成果を挙げたという。
- 註5：村上史朗・吉村真理子編『教育実習』ミネルヴァ書房（保育講座18）1991年
大場幸夫・大塚兼司編『保育実習』ミネルヴァ書房（保育講座13）1994年
待井和江・福岡貞子編『保育実習・教育実習』第3版 ミネルヴァ書房（現代の保育学6）2001年
赤田博・野村和子編著『教育・保育実習総論』保育出版社 2001年

山 森 泉

- 註6：全国保育士養成協議会専門委員会編著 『保育士養成資料集』第36号「効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅰ ～保育実習の実態調査から～」2002年 26ページ
- 註7：全国保育士養成協議会専門委員会編著 『保育士養成資料集』第36号「効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅰ ～保育実習の実態調査から～」2002年 95-96ページ
- 註8：全国保育士養成協議会専門委員会編著 『保育士養成資料集』第36号「効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅰ ～保育実習の実態調査から～」2002年 270ページ